

だいいちか
第一課「バビロン時代の預言ーイザヤ」

イザ 6:13 そこには、なお十分の一が残るが、それさえも焼き払われる。しかし、切り倒されたテレビンや榎の木のよう
に、それらの間に切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔。」

イザヤ 6:13 は、あとから詳しく見ましょう。

こんげつ がくいんふくいんか じんぶつ かん しゅだい けいせい
今月の学院福音化は人物に関する主題で形成されていますが、皆さんは、その時代ごとに、その人物が、どんな働きをし
たのかに焦点を合わせるのではなく、その人物を通して、神様がどんな働きを成し遂げられて、どんなみことばと約束
をくださったのか、そこに焦点を合わせてください。

では、今日の1課では、イザヤ書を中心にみことばを整理しています。

よげんしゃ
＜イザヤ預言者について＞

イザヤ預言者は、南ユダ王国の預言者でした。ウジヤ王が死んだ年から、ヒゼキヤ王まで、およそ50年にわたって神様の
みことばを宣べ伝えました。

イザヤ 1章 1節を見ましょう。

01 アモツの子イザヤの幻。これは彼がユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代
に見たものである。

4人の王がいる間、働きをしたということです。

しよ
＜イザヤ書について＞

そうしてみると、かなり長い働きであったのですが、その分、イザヤ書自体の分量は長いです。皆さんは知っていますで
しょう。66章まであります。そのイザヤ書は大きく二つに分けることができます。最初、1章から 39章までになります。
それから、40章から 66章までです。

1章から 39章には、イスラエルとその周辺の国々に対する神様の警告とさばきのメッセージを伝達しています。40章
から 66章は全く違う文体と流れで流れます。その内容は、回復と救いに関するみことばです。

1～39章	40～66章	皆さん、今、この表を見て何か感じることはないでしょうか。聖書の構造と全く同じでしょう。聖書は66巻でイザヤ書は66章になっていて、旧約が39巻でイザヤ書の前半部が39章。残りの新約は27巻で、イザヤ書の40章から66章までが27章になります。
けいこく 警告、さばき	かいふく すく 回復、救い	

<前半部（1～39章）>

前半部である1章から39章の始まりは、1章2節から6節までを見れば、次のような内容です。

02 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。主が語られるからだ。「子どもたちはわたしが育てて、大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。

03 牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」

04 わざわいだ。罪深き国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。

05 あなたがたは、反抗に反抗を重ねてなおも、どこを打たれようというのか。頭に残すところなく病み、心臓もすべて弱っている。

06 足の裏から頭まで健全なところはなく、傷、打ち傷、生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない。

この内容は、神様の前に罪を犯しているイスラエルを暴いていることで、神様を離れた人間の罪性を暴露する場面ということが出来ます。それゆえ、神様がそこに対するさばきをされるだろうという内容が39章まで続いています。

<後半部（40～66章）>

そして、後半部である40章の始まりは次のようです。（40:1-2）

01 「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——

02 エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを主の手から受けている、と。」

40章からは、回復と救いについてのみことばを伝えていますが、「慰めよ、慰めよ」ということばで始まっています。

<新約聖書に引用されたイザヤ書>

新約聖書で最も多く引用された聖書がイザヤ書です。旧約のどんな預言書よりも、メシア、イエス・キリストについての預言が最も多く記録されています。代表的なことが、7章でしょう。「インマヌエル」として来られるイエス・キリストがお生まれになったことについて記録されていて、そして、53章には、贖いの代価のいけにえとして死ぬことについて預言しています。それゆえ、イザヤ書を第5の福音書だという人もいます。新約は、4つの福音書があるでしょう。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、その次の第5福音書をイザヤ書だと言う人もいます。または、旧約聖書の福音書だとも言われます。それだけ、イザヤ書はとても大きい比重を占める聖書です。

イエス様が公生涯をはじめられたときに、ガリラヤのいろいろな会堂で教える働きを始められたでしょう。ルカの福音書4章を見ると、故郷であるナザレにある会堂で、イエス様がイザヤの書を読まれる内容が出てきます。イザヤ61章の内容を読まれて、最後にこのように話されます。

ルカ4章21節にある内容です

「イエスは人々に向かって話し始められた。『あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。』」

この聖書のことばが、イザヤ書のことです。イザヤ書で数えきれないほど預言されたメシア契約が、イエス様本人についての預言であったということを語られたのです。

＜イザヤ書の主題＞

イザヤ書全体の主題について見ましょう。イザヤ書全体の主題である同時に、事実上は聖書全体の主題です。それは、イザヤ預言者の名前の中に意味が込められています。

イザヤ (Ysha' yah) = (Ysha—救い) + (yah—ヤハウェ) = 「神様は救いである」

イザヤという名前は、「救い」という意味の「イエシャ（ヘブル語）」という単語と、そして「ヤハウェ」という意味を持っている「ヤハ（ヘブル語）」の複合語です。その意味は、「ヤハウェは救いである」ということでしょう。私たちは、エホバ、ヤハウェという言葉（主という言葉）を使ったりしますが、イスラエル民族、ユダヤ人は、ヤハウェという言葉は使いませんでした。ヤハウェということばは、神様が神様の呼び名として与えてくださった名前ですが、それをむやみに呼ぶことはできないと、「主」は「アドナイ」という名前呼びました。

イザヤという名前の意味「ヤハウェは救いである」というのは、事実上、聖書全体に記録されている内容でしょう。ただイエス・キリストを通して神様の救いについて記したものが聖書です。それゆえ、その聖書全体の縮小版と言うことができるイザヤ書の主題もまた、「ヤハウェ、神様は救いである」ということです。

今日の本文が入っているイザヤ書6章は、イザヤが召される、召命を受ける場面が出て来ます。6章にイザヤ書の全体のメッセージがここに含まれています。

6章1節を先に見てみましょうか

01 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、

1節の内容の中に全イスラエルと国々と歴史の主人は、神様だということを確かに明らかにしています。それを何を通して知ることができるでしょうか。

「高く上げられた御座に着いておられる主」とあります。世の中の王たちは、立てられて、また、退いて、また、死んだりもします。しかし、まことの王である神様は、高く上げた御座に永遠に王として座っておられる方です。そして、1節の後半に「その裾は神殿に満ち」と、裾は栄光が現れる所ですが、それは神殿中にいっぱいだと言われています。イエス・キリストを頭にした神様の民、個人とその共同体は、教会であり神殿でしょう。その中に、神様の栄光が満ちています。

3節を見ましょう。

03 互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」

神様は聖なる神様です。イザヤ書の中では、イスラエルの聖なる方という表現を25回も使っています。その偉大な神様の栄光は、教会と神殿の中だけに満ちているではありません。全地に満ちるということです。

しかし私たちが、イザヤ書1章4節で見たように、神様が選ばれたイスラエルの民は聖なる状態ではありませんでした。みな神様に背を向けて離れ去り、墮落した、汚れた民になったということです。それゆえ、イザヤがその聖なる神様の前に立ったときに、このような告白をするしかなかったのです。

6章 5節です

05 私^{わたし}は言^いった。「ああ、私^{わたし}は滅^{ほろ}んでしまう。この私^{わたし}は唇^{くちびる}の汚^{けが}れた者^{もの}で、唇^{くちびる}の汚^{けが}れた民^{たみ}の間に住^あんでいる。しかも、万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}である王^{おう}をこの目^めで見^みたのだから。」

自分^{じぶん}自身^{じしん}と自分^{じぶん}の足^たりなさ、そのように足^たりないイスラエル^{いすらえる}民族^{みんぞく}の中^{なか}に在^ある者^{もの}なので、彼^{かれ}らと同^{おな}じく汚^{けが}れた者^{もの}だと、自分^{じぶん}をそのように表^{ひょう}現^{げん}をしています。そのように、汚^{けが}れた、神^{かみさま}様^{さま}の前^{まえ}では罪^{つみ}人^{びと}である私^{わたし}は、もう神^{かみさま}様^{さま}の前^{まえ}で死^しぬと告^こ白^{はく}をするのです。汚^{けが}れて、墮^だ落^{らく}したイスラエル^{いすらえる}の民^{たみ}が迎^{むか}える結^け果^くは、神^{かみさま}様^{さま}のさばきのほかはありません。

6章 11節から 12節

11 私^{わたし}が「主^{しゅ}よ、いつまでですか」と言^いうと、主^{しゅ}は言^いわれた。「町^{まち}々^{まち}が荒^あれ果^はてて住^すむ者^{もの}がなく、家^{いえ}々^{いえ}にも人^{ひと}がいなくなり、土^ど地^ちも荒^あれ果^はてて荒^あれ地^ちとなる。

12 主^{しゅ}が人^{ひと}を遠^とくに移^{うつ}し、この地^ちに見^み捨^すてられた場^ば所^{しょ}が増^ふえるまで。

罪^{つみ}からの報^{ほう}酬^{しゅう}は死^しだとローマ^{ろま}人^{にん}への手^て紙^{がみ}では言^いわれています。そのように汚^{けが}れた罪^{つみ}人^{びと}であるイスラエル^{いすらえる}は、神^{かみさま}様^{さま}の前^{まえ}で完^{かん}全^{ぜん}に滅^{ほろ}びるようになると宣^{せん}言^{げん}しておられるのです。それが、神^{かみさま}様^{さま}の公^{こう}義^ぎであり、正^{せい}義^ぎです。このように、イザヤ^{いざや}書^{しょ}では、神^{かみさま}様^{さま}の強^{きやう}力^{りき}なさばきを語^{かた}っているのと同^{どう}時に、回^{かい}復^{ふく}のみこ^ことばも与^{あた}えてくださっています。

先^{さき}ほど、イザヤ^{いざや}書^{しょ}の前^{ぜん}半^{はん}39章^{しょう}までと後^{こう}半^{はん}40章^{しょう}から66章^{しょう}、それをさばきと回^{かい}復^{ふく}で分^わけたでしょう。イザヤ^{いざや}書^{しょ}全^{ぜん}体^{たい}を集^{しゅう}約^{やく}した一^{いつ}節^{せつ}を選^{えら}べと言^いわれるなら、それが今^け日^ふの本文^{ほんぶん}の13節^{せつ}なのです。

13 そこには、な^{じゅう}お十^{ふん}の一^{いち}が残^{のこ}るが、それさ^やえも焼^はき払^{はら}われる。しかし、切^きり倒^{たお}されたテレビ^{てれび}ンや樅^{かし}の木^きのように、それらの間^{あいだ}に切^きり株^{かぶ}が残^{のこ}る。この切^きり株^{かぶ}こそ、聖^{せい}なる裔^{すえ}。」

「そこには、な^{じゅう}お十^{ふん}の一^{いち}が残^{のこ}るが、それさ^やえも焼^はき払^{はら}われる」ここまでが、さばきでしょう。「しかし、切^きり倒^{たお}されたテレビ^{てれび}ンや樅^{かし}の木^きのように、それらの間^{あいだ}に切^きり株^{かぶ}が残^{のこ}る。この切^きり株^{かぶ}こそ、聖^{せい}なる裔^{すえ}。」ここは、回^{かい}復^{ふく}を語^{かた}られているのです。

皆さんは、よく知^しっている「切^きり株^{かぶ}」「聖^{せい}なる裔^{すえ}」こういうことばがで^でてきます。イザヤ^{いざや}書^{しょ}の中^{なか}には、残^{のこ}りの者^{もの}についての記^き録^{ろく}もとてもたくさんあります。私^{わたし}たちが言^いっているレムナントでしょう。しかし、皆さんが必^{かなら}ず記^き憶^{おく}しておくべきこととは、残^{のこ}りの者^{もの}レムナントが、どのように残^{のこ}りの者^{もの}になったかということです。

イザヤ^{いざや}書^{しょ}が初^{はじ}めから明^{あき}らかにしているように、人^{にん}間^{げん}はすべ^{かみ}てが神^{かみさま}様^{さま}を離^{はな}れて汚^{けが}れた者^{もの}だとい^はな^{はな}と話^{はな}しています。聖^{せい}なる神^{かみさま}様^{さま}の前^{まえ}に、聖^{せい}なるものではない者^{もの}になったこと^{すえ}です。それが、ある日^ひ、突^{とつ}然^{ぜん}、聖^{せい}なる裔^{すえ}（種^{たね}、または子^し孫^{そん}）になること^{すえ}ができるでしょうか。ある日^ひ突^{とつ}然^{ぜん}、聖^{せい}ではない者^{もの}が、聖^{せい}なる裔^{すえ}にはなれないのです。聖^{せい}書^{しょ}で種^{たね}（裔^{すえ}）と翻^{ほん}訳^{やく}されている単^{たん}語^ご

（ゼラ）は、すなわち子^し孫^{そん}を話^{はな}すこと^{すえ}ですが、それは、すなわち創^{そう}世^{せい}記^き3章^{しょう}15節^{せつ}女^{おんな}の子^し孫^{そん}とい^はな^{はな}ときの、その「子^し孫^{そん}」です。その子^し孫^{そん}を語^{かた}っています。イエス・キリストです。イエス・キリストを過^としてのみ、私^{わたし}たちは切^きり株^{かぶ}、残^{のこ}りの者^{もの}にな^なることができるとい^はな^{はな}ことです。残^{のこ}りの者^{もの}が、何^{なに}か神^{かみさま}様^{さま}の前^{まえ}に立^り派^ぱな仕^し事^{ごと}をしたことがあ^あって、残^{のこ}りの者^{もの}になったのではなく、創^{そう}造^{ぞう}の前^{まえ}、永^{えい}遠^{えん}の前^{まえ}に、すでにイエス・キリストの中^{なか}にある者^{もの}として選^{えら}ばれた者^{もの}だとい^はな^{はな}ことです。ですから、聖^{せい}なる方^{かた}、イエス・キリストによ^よって、切^きり株^{かぶ}、残^{のこ}りの者^{もの}になったとい^はな^{はな}ことを覚^{おぼ}えていてください。

そこに対する何か所か聖句を見ます。

イザヤ 1 章 9 節のみことばです。

09 もしも、万軍の主が私たちに生き残りの者をわずかでも残されなかったなら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じになっていたであろう。

神様が残されなかったら、私たちはみな滅びて死ななければならないということです。

イザヤ 37 章 31 節から 32 節です。

31 ユダの家の中の逃れの者、残された者は、下に根を張り、上に実を結ぶ。

32 エルサレムから残りの者が、シオンの山から、逃れの者が出て来るからである。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。』

残りの者がどのように残ることになったと言われているか。「神様の熱心によって」残ようになったのです。

イザヤ 10 章 20 節から 22 節です。

20 その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。

21 残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。

22 たとえ、あなたの民イスラエルが海の砂のようであっても、その中の残りの者だけが帰って来る。壊滅は定められ、義があふれようとしている。

残りの者だけ神様に立ち返ると言われていますが、その残りの者は主に頼る者だと言われています。この時代にも、残りの者は、ただ環境や状況の中でも神様に頼る者です。イザヤ書をこのようによく調べながら見ると、この残りの者に対する記録は、前半部分 39 章の中だけで記録されています。さばきと滅びの中で、神様の恵みで残りの者は確かにいるという内容であり、40 章から 66 章の回復を語っているところでは、残りの者が、どのように生きていくようになるかを記録している内容でした。みなさん、概論だけ聞いているのでは面白くないでしょうから、一度、イザヤ書を 1 章から 66 章まで、じっくりよく読んでみてください。

では、最後にイザヤの名前がイザヤと聖書全体の主題であったように、イザヤの息子（むすこ）の名前にも、神様の救いに対する摂理の内容が含まれています。イザヤの長男（ちやうなん）の名前は「シェアル・ヤシュブ」という名前です。「残りの者だけが帰って来る」という意味です。それから、次男（じなん）が生まれたのですが、神様が名前をつけてくださいました。「その名をマヘル・シャルル・ハシュ・バズと名づけよ。」その名前は「分捕り物はすばやく持ち去られる」それを直訳するなら、さばきがすぐに来るということです。ですから、神様の恵みで残りの者以外には、さばきがすぐに臨むことになるということです。

イザヤ 8 章 18 節を見ると、息子たちを通して神様のみこころが成されたという内容があります。

18 見よ。私と、主が私に下さった子たちは、シオンの山に住む万軍の主からのイスラエルでのしるしとなり、また不思議となっている。

神様は、その息子たちを通して、神様を証しすることを願っておられます。

私^{わたし}と皆さんは、残り^{のこ}の者^{もの}でしょう。どのように残り^{のこ}るようになりましたか。恵^{めぐ}みによって。

最後^{さいご}にローマ 11 章 5 節^{しょう せつ}を読みましよう。

05 ですから、同^{おな}じように今^{いま}この時^{とき}にも、恵^{めぐ}みの選^{えら}びによって残^{のこ}された者^{もの}たちがいます。

それが、私^{わたし}たちであることを信^{しん}じます。